

# 誇りと愛着がもてる 絆を大切にすまち 養老 「家族の絆・愛の詩」事業を通して

養老町教育委員会

## 1 「家族の絆 愛の詩」の概要

岐阜県養老町は、緑の山、清らかな水に恵まれた歴史の町です。町名は、この地の“孝子伝説”を耳にした元正天皇が行幸され、年号を「養老」に改元されたことに由来しています。

「家族の絆 愛の詩」は、平成12年から始まりました。その目的は、「養老の滝」にまつわる孝子伝説の底に流れている尊い心を受け、家族の絆や他者への思いやり、感謝の心を後世に伝えていきたい、町民に広く浸透させていきたいという願いの具現です。この事業を通して、町内児童生徒の言語感覚、感性を高めるとともに、地域住民の家族に対するあたたかい思いやりの心を啓発したいと考えています。また、家族の絆を大切にすまの思いを「親孝行のまち養老」として発信するため、全国募集を行っています。

今年度で21回目を迎え、製本タイトルは下記のように推移しています。

本のタイトル	発行年（年度）
「親と子・愛の詩」	2000年（平成12年度）～2002年（平成14年度）
「家族・愛の詩」	2003年（平成15年度）～2005年（平成17年度）
「家族”絆”・愛の詩」	2006年（平成18年度）～2008年（平成20年度）
「家族の絆・愛の詩」	2009年（平成21年）～現在

### 年間計画

- 6月 募集開始
- 9月 募集〆切 1次審査・2次審査
- 10月 最終審査にて受賞者決定
- 11月 町HPにて審査結果（受賞者）の報告
- 12月 製本作業
- 1月 「家族の絆 愛の詩」表彰式・発表会
- 2月 町内各校・西濃圏域の教育委員会・青少年育成関係団体・応募校・県内図書館へ「家族の絆 愛の詩12」謹呈

養老町民憲章

わたしたちの町、養老町は、緑の山、清らかな水に恵まれた歴史の町です。

わたしたちの、この美しいふるさとには、先人のたゆまぬ努力によって伸びつづけてきました。

わたしたちは、愛の輪をさらにひろげ、力をあわせて未来につづく明るい町をつくりまします。

1. おはよう こんにちは  
と元気な声がわく町にしましょう

1. 美しい自然の中で 力いっぱい  
働ける町にしましょう

1. おとしよりが 豊にくらせる  
町にしましょう

### 令和2年度 審査員 日本現代詩人会会員

- ・審査委員長 富長 覚梁（養老町在住）
- ・審査員 頼 圭二郎 椎野 満代 岩井 昭 天木 三枝子

**部門・賞**

- ・部門 「小中学生の部」「一般の部（高校生含む）」
- ・賞 最優秀賞1名・優秀賞2名・佳作20名程度  
受賞者は、製本「家族の絆 愛の詩」に掲載

**応募数**

- ・日本全国から作品が多数応募されます。
- ・令和2年度は42都道府県より応募がありました。  
近年、メールでの応募が増加しています。



令和元年度受賞者

回数	年度	一般の部	小中の部	合計
1	12	544	989	1,533
2	13	782	904	1,686
3	14	457	727	1,184
4	15	394	764	1,158
5	16	435	774	1,209
6	17	651	1,349	2,000
7	18	399	1,639	2,038
8	19	433	1,143	1,576
9	20	301	1,153	1,454
10	21	353	1,402	1,755
11	22	480	1,451	1,931
12	23	330	1,930	2,260
13	24	376	2,067	2,443
14	25	280	2,019	2,299
15	26	287	2,313	2,600
16	27	565	2,427	2,992
17	28	759	2,320	3,079
18	29	699	2,154	2,853
19	30	345	2,105	2,450
20	元	283	2,130	2,413
<b>21</b>	<b>2</b>	<b>335</b>	<b>2,004</b>	<b>2,339</b>
	計	9,488	33,764	43,252

「家族の絆 愛の詩」応募作品数の推移

**2 教育委員会の意図と働きかけ**

本町は、ふるさと教育の推進に力を入れており、テキストを作成して取り組んでいます。「家族の絆 愛の詩」事業は、ふるさと教育で培いたい地域への愛着や自己肯定感の育成とつながっています。

学校教育では、国語やふるさと学習の授業で取り扱っています。また、審査員による詩の専門的な指導の場を位置付け、思考力や表現力、感性を育む教育活動に取り組んでいます。事業開始当初は、小中学生の作品は作文が多かったですが、近年は詩としても大変優れた作品が増えています。社会教育では、PTAの家庭教育学級や中央公民館の「愛の詩講座」で、町民への学習機会の提供と啓発を行っています。詩を書くことを通して、家族のつながりや相手を大切に思う気持ちを“ことば”にすることで、「改めて、家族の絆に気づいた」という感想が寄せられています。



令和2年度 小中学生の部 最優秀賞作品

「家族の絆 愛の詩」第12集より

糸 新井隼月

私のマスクは 空色マスク  
青くかすんだ 春の空  
弟のマスクは 黄色のマスク  
一面広がる 春野原  
今年の春は 消えた春  
命の数を伝える  
病の足音聞こえれば  
不安の糸がからまって  
人と人をつないでる  
糸がぶつ切り切れた音  
頬をおおった その布で  
街にあふれた のっぺらぼう  
顔が見えない 私たち  
こんなに不安になるんだね  
足りないマスクの代わりにと  
おばあちゃんが作った布マスク  
使い古した 木綿のハンカチ  
ほどこいてぬって 糸通す  
色どりの 春の色  
使えなかった あの糸も  
吹き込まれた 春の息吹  
僕のだよと弟が  
つけようとした 黄色のマスク  
上手に耳にかからない  
かわりに私がかけてやる  
こもった声で ありがとう  
目が糸みたいに細まった  
ああ、そうなんだ  
のっぺらぼうなんていないんだ  
見えないだけで だれだって  
そのおわれた布の下  
笑って 泣いて たえている  
糸みたいなその目元  
人と人をつなぐ糸  
切れないよと教えてくれた  
病の足音遠のいて  
待ちに待った学校へ  
やっと会えた友だちに  
ちよっとはなれて手をふる  
たちまちお互い目が糸に  
ほらだいじょうぶ  
見えなくなったって感じるよ  
私とみんなをつなぐ糸  
私と家族をつなぐ糸